

糸満市の歴史と民俗を歩く

旧喜屋武村

集落ガイドマップ



旧喜屋武村域各字の位置図

糸満市と旧喜屋武村の位置図



【もくじ】

旧喜屋武村のあらまし

旧喜屋武村について P2

旧喜屋武村の沿革 P2

旧喜屋武村の主な年中行事 P2

旧喜屋武村各地の主な年中行事一覧 P3

集落ガイドと1945年ごろの屋号地図

喜屋武 P4 福地 P7

山城 P8 東辺名 P10

上里 P12

東辺名に残る伝説 P11

一緒に歩こう

名勝地・歌碑・文化財 P13

旧喜屋武村域の現況図 P14

謎の南山王 P16



旧喜屋武村のあらまし

旧喜屋武村について

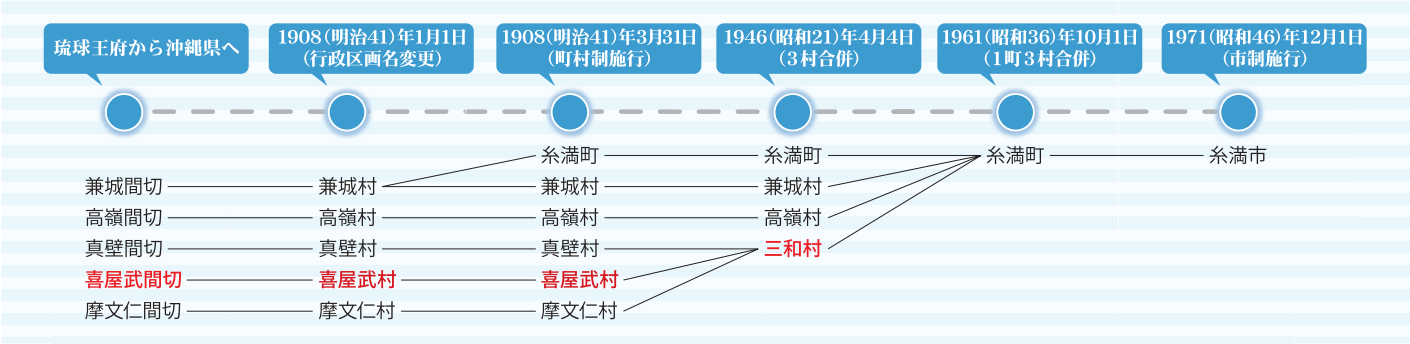
旧喜屋武村は東シナ海と太平洋を臨む沖縄本島最南端の地域で、現在の糸満市字喜屋武・字福地・字山城・字束里（東辺名・上里）の4か字にあたる。主な産業は農業で、ブランド人参の美らキャロットをはじめとする野菜類やサトウキビ、小菊を中心とした花きを栽培しているほか、肉用牛も飼養されている。また字喜屋武には漁港も整備されており、漁業も行われている。

旧喜屋武村の沿革

琉球王府時代、糸満市域は現在のように1つの行政区ではなく、喜屋武間切のほか、兼城間切・高嶺間切・真壁間切・摩文仁間切の5つの間切に分かれていた。1879（明治12）年に沖縄県が設置された後もこの体制が引き継がれたが、明治期後半に間切が村に改められたことで、喜屋武間切から喜屋武村となった。

喜屋武村はその後40年ほど存続したが、沖縄戦による被害で人口が減少し、行政運営が難しくなったことから、1946（昭和21）年に近隣の真壁村・摩文仁村と合併して三和村の一部になった。その後、1961（昭和36）年にはさらに糸満町・兼城村・高嶺村と合併して糸満町となり、1971（昭和46）年の市制施行後は糸満市となった。

旧喜屋武村のうち、字束里はもともと東辺名村と上里村であったものが1903（明治36）年に合併し、両村名の一字字をとって東里村になり、1908（明治41）年1月1日の行政区画名変更以降は字束里となった。



旧喜屋武村の主な年中行事

海に面した旧喜屋武村域の年中行事は農耕に関わるものだけでなく、海に関連したものも多く見られる。特に字喜屋武には他地域では見られないピーリンポーリンやカマサーウグワンなど独特な行事も行われている。ここでは各地域の主な年中行事の一覧表とともに、旧喜屋武村の特色ある行事を紹介する。なお、文中・表中の月日は旧暦である。

ピーリンポーリン

3月3日は女性がハマウリ（浜下り）を行う日とされているが、字喜屋武にはピーリンポーリンと呼ぶ男性のみで行うハマウリがあり、かつては主にウミンチュ（漁師）の年配者が参加した。ジルーメーと呼ぶ海岸の拝所に集まった男たちは向こう一年の航海安全や大漁などを祈願した後、その場で宴席を設けて歌い踊り、賑やかに酒を飲み交わす。ピーリンポーリンの言葉の意味は不明だが、この日に子どもたちが歌って遊んだ歌の歌詞に登場する。



ジルーメーの拝所の前でカチャーシーを踊る参加者（字喜屋武）

喜屋武ハーリー

ハーリーはユッカシハー（5月4日）に海神に豊漁祈願をする行事で、字喜屋武で行われている。ウグワン（御願）と呼ばれる拝み行事のほか、ムラを北支部・中支部・南支部と3つに分けての爬龍船競漕が喜屋武漁港で行われる。競漕は御願パーリーにはじまり、勝負パーリー、アガイパーリーなどが行われるが、なかでもタイグーヌイ（二人乗り）と呼ぶ小さなサバニを利用した2人乗りの競漕は喜屋武独特で、大きな見どころとなっている。近年競漕は5月4日以降で、直近の日曜日に行われている。



サバニを操るタイグーヌイのハーリーシンカ（字喜屋武）

ウマチー（御祭）

麦と米の出穂と収穫を祈願する祭祀で、2月、3月、5月、6月と年に4回行われることから、18世紀に書かれた琉球王府の地誌『琉球国由来記』では「麦稻四祭」と総称し、2月は麦穂祭、3月は麦大祭、5月は稲穂祭、6月は稲大祭とされる。旧喜屋武村地域では現在でもすべての地区で上記4回が行われている。かつてはカミンチュ（神人）らによって、ミキ（米や麦で造られる甘い飲み物）などが拝所に供えられたが、東辺名など稲作が難しい地域では米の代わりに芋や麦、大豆などでミキを造っていたという。



現在東辺名ではミキの代わりにアマガシを供えている（東辺名）

チナヒチ（綱引き）

かつては旧喜屋武村域すべてのムラで、豊作を祝うカシチージナ（強飯綱）や翌年の五穀豊穰を予祝するジューグヤー（十五夜）などのチナヒチ（綱引き）が行われていた。現在でも綱引きを行っているのは字福地と字山城で、そのうち字山城では8月11日と15日の2回、山城集落センター前の道でマカヤ（チガヤ）で作った綱を引いている。綱引きを終えろと綱をムラの西端で燃やし、人々はその炎の上を無病息災や家内安全を願って飛び越える。



多くの子どもたちが勇気を出して火をまたぐ（字山城）

カマサーウグワン

8月11日にムラの拝所を巡拝し、豊作や大漁などを祈願する字喜屋武の行事。志礼門中の先祖が、自分を育ててくれた（仲間）とムラの人々をシリーヌトゥン（志礼の殿）の庭に招いて、感謝の酒宴を開いたことが起源だとされ、その時の肴がカマサー（カマス）であったため、この呼び名が付いたという。現在はカマサーに限らず、魚料理を供えてウグワンのみ行っているが、かつては同日にブーマー踊りや角力大会も催されていた。



かつて供物のカマサーは志礼の殿で煮炊きした（字喜屋武）

綱引き前の豊漁祈願

福地で8月11日の綱引きの前に行われていたウグワンで、クニムトゥ（国元）だといわれる（仲道）の神屋やピージルと呼ぶ霊石を拝んだ。福地は海に面していないムラでありながら、かつては漁を行っており、この時に酒と海産物を供えて大漁を祈願したという。

旧喜屋武村各地の主な年中行事一覧

月日(旧暦)	行事名	喜屋武	福地	山城	東辺名	上里
2月15日	二月ウマチー（麦穂祭）	○	○	○	○	○
3月吉日	マークサラウグワン	○				
3月3日	ピーリンポーリン	○				
3月15日	三月ウマチー（麦大祭）	○	○	○	○	○
3月吉日	ハルンクトゥ	○				
5月4日	ハーリー	○※1				
5月15日	五月ウマチー（稲穂祭）	○	○	○	○	○
6月15日	六月ウマチー（稲大祭）	○	○	○	○	○
6月25日	カシチージナ（強飯綱）	▲			▲	
7月13日	旧盆 エイサー	○※2	▲	▲	▲	▲
7月15日	旧盆 角力大会			▲		
8月11日	カマサーウグワン	○				
	綱引き前の豊漁祈願		▲			
	綱引き		○	○		
	角力大会	○※3	▲	○		▲
8月15日	ジューグヤー（十五夜）綱引き		▲	○		▲
	ジューグヤー（十五夜）ウシデーク		▲			▲
	ジューグヤー（十五夜）角力大会		▲		▲	▲
9月9日	クングワチクニチ、ムヌメー				○	▲
	ンムマチー		▲			
	インカンウンチケー				▲	
9月吉日	マークサラウグワン	○				
	ハルンクトゥ	○				
12月25日（新暦）	チリタンチョー、チリシタンチョー、ミーンマリユエー	○	○※4	○	○	○

○＝現在行われている ▲＝現在行われていない（2020年現在 ウマチーなど行事によっては門中や家庭主体で行われているものも含む）
※1 競漕は5月4日以降で直近の日曜日に開催 ※2 奉納エイサーのみ開催
※3 現在は8月吉日に開催 ※4 現在は新暦12月の第3日曜日に開催

インカンウンチケー

東辺名では9月9日のムラウグワン（村御願）で拝所やカー（井泉）などを巡拝した後、インカンウンチケーと呼ぶウグワンを行った。これは字喜屋武と字山城、それぞれの字境で供物を供えて拝むもので、いずれの場所でも最後に印鑑に見立てた石を拾って持ち帰ったという。ヒヌカンウンチケーとも呼んだ。



酒や線香のほか、赤飯と豆腐が供えられた（東辺名）

ンムマチー（芋ウマチー）

字福地で戦前まで行われていた芋の豊作を願う行事。9月9日に東辺名に行く道と山城へ行く道が交差する辻に祀られている石を拝んだといい、その時に〈布殿内〉で作ったカンダバースネー（芋の茎と葉の和え物）を供えたという。



行事はなくなったが拝所は現在も残っている（字福地）

ハルンクトゥ

字喜屋武で3月と9月に門中で拝所や墓を巡拝する行事で、女性のみで行われる。トーシー（現在使っている墓）を拝む時は墓前ではなく、畑の傍など墓の見える場所からウトゥン（巡拝）をするのが特徴で、重箱料理や握り飯が供えられる。字喜屋武ではシーミー（清明祭）の墓参行事がなく、その理由として琉球王府の伝達がムラに届かなかったためだとの言い伝えがある。



ハルンクトゥとは「畑でする行事」の意味とされる（字喜屋武）

チリタンチョー

新暦12月25日、その年に産まれた子どもをムラの成員として報告するとともに健やかな成長を祈願する行事で、ムラの拝所を巡拝した後、祝宴が開かれる。キリスト教禁止令が出されていたころ、宗門改帳を琉球王府に提出していたことに由来する行事だという。旧喜屋武村域では全字で行われている。



拝所にはその日の料理を供えて祈願する（上里）

- 集落ガイド（本文）について
 - ・各字見出しの人口と世帯数は2021（令和3）年2月28日現在のものである。
 - ・文中の月日は基本的に旧暦である。ただし新暦で行う行事には新暦と記した。
 - ・家の屋号を表す場合は〈○○〉と表記した。
- 屋号地図について
 - ・各字の「屋号地図」は『糸満市史 資料編7 戦時資料下巻』収録の「屋号地図」に若干の加除訂正を行ったものである。
 - ・各集落とも現状と対比しやすくするため、戦後の番地を付してある。
 - ・屋号を（ ）内に表示したものは1945（昭和20）年当時家族全員が死亡、または移民、出稼ぎなどで居住者のなかった家である。
 - ・本図の屋敷の形状や面積、道幅などは必ずしも正確なものではない。また各字の縮尺は統一していない。
 - ・1945（昭和20）年に降に移転したことが明らかな拝所などについては、「現在の○○」とし、現在地点も併記した。
- 現況図について
 - ・2020（令和2）年の国土地理院地図に、「糸満市地籍図（大字・小字集成図）」から小字界、小字名などの情報を転記した。
 - ・遺跡、グスクなどについては「糸満市文化財分布図―埋蔵文化財―」を参照のうえ、地籍図などをとくに概念的な範囲を記した。
 - ・市道については、主要な道路名についてのみ表示した。
 - ・門中墓については、現況図範囲内にある旧喜屋武村域4字の成員が使用する墓を「○○腹」として位置を示し、それぞれの腹、門中名称の後ろに（ ）で字（字束里の場合は旧村）の略称を入れた。2つ以上の腹・門中で共有している場合はいずれも併記した。略称は以下の通り。
 - 旧喜屋武村：字喜屋武→（喜）、字福地→（福）、字山城→（山）、東辺名→（東）、上里→（上）／旧摩文仁村：字南波平→（南）／旧真壁村：字名城→（名）、字小波蔵→（小）。
 - ・旧土族系の家の墓の場合は「○○家」とし、それぞれの家の後ろに（ ）で字の略称を記した。
 - ・各字の公民館や地域のランドマークになりうる施設にはその名称を記した。
 - ・拝所、カーなどは、該当字の解説文の番号とともに名称を記した。

きやん 喜屋武

方言名：チャン
人 □：1,058人
世帯数：521世帯

旧喜屋武村の中心地であったムラ。ヘーランメーと呼ばれる広場を中心に住宅地が広がり、集落内に多くの拝所が点在する。そのほか喜屋武岬や具志川城跡など、海を臨む名勝や遺跡もぜひ訪ねてみたい。

❖拝所❖

1 ヌンドウンチ（ヌン殿内）



ムラの祭祀の中心となる拝所。屋敷の中央に神屋があり、向かって右手に『琉球国由来記（以下由来記）』の「喜屋武巫火神」だといわれるヒヌカンがあるとされる。

2 〈仲間〉の神屋

〈仲間〉は喜屋武の始まりとされる旧家で、タキムトゥ（嶺元）といわれている。ヌンドウンチ同様、ムラの重要な拝所である。

3 ウクマヌトゥン（奥間ヌ殿）

敗走した中山の武寧王がこの地に逃げのび、〈仲間〉の娘を娶って住んだ屋敷だとされる拝所で、『由来記』の「奥間之殿」だとされている。子孫と伝わる大幸地門中などが拝んでいる。

4 ナカヌトゥン（中の殿）



ムラの中心的な拝所のひとつで、近年建てられた祠の入口には「金満之御嶽」と記され、中には石が祀られている。一帯はトゥンヌマー（殿の庭）と呼ばれ、ウマチーなどのムラ行事が行われることから『由来記』の「喜屋武庭之殿」だと考えられ、ナカヌトゥンも「喜屋武之殿」の可能性があるとされている。ヌルが馬に乗る際に踏み台にした石も残っており、行事の参加者が片足をのせてから帰るならわしがある。

5 ナカマウフグル（仲間ウフグル）

トゥンヌマーの一角にある拝所。ウフグル（大ごろう）とはムラの長のことで、ニーヤ（根屋）である〈仲間〉ではニーツチュ（根人）をこう呼び、長男がこの神役についたという。

6 ムトゥブヤー（本部屋）

戦前ムラヤー（村屋）だった屋敷地一角の祠。子のない〈本部ヤー〉の夫婦がムラに財産を寄進する代わりに、自分たちのグونس（祖先）を祀ってほしいと頼んだため造られたという。

7 シリーヌトゥン（志礼の殿）

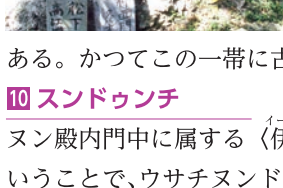


東辺名のピンタルチーの子孫だという志礼門中が管理するトゥンで、ムラの遙拝所もある。昔カミンチュ（神人）が祠前の石の上で祭祀の衣装に着替えたと伝わる。

8 ナンザトゥヌトゥン（並里の殿）

『由来記』に「並里之殿」と見えるトゥン。雑木林の中に3か所の拝所があり、島当、仲間、前原などの門中が拝んでいる。

9 クバドゥン（クバ殿）



クバオーとも呼ばれるウタキ（御嶽）で、『由来記』の「並里ノ嶽」だといわれている。手前の大きな岩の周囲に各門中の碑が並んでおり、奥の岩には13の門中の古墓がある。かつてこの一帯に古い集落があったとも伝わっている。

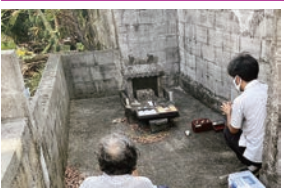
10 スンドウンチ

ヌン殿内門中に属する〈伊元〉の神屋。ヌン殿内よりも古いということで、ウサチヌンドウンチ（御先ヌン殿内）とも呼ばれる。

11 ナカジン

農協跡地にあった、石囲いの盛土に80cmほどの黒い石が立てられていた拝所。現在は形跡もないが番所跡として拝んでいる。

12 〈南ノ徳嶺〉と〈新東玉井〉の間の拝所



42番地と43番地の間の小径にある祠で、名称は不明だがジトゥービヌカン（地頭火神）だといわれている。また首里への遙拝所やカミミチではないかという説もある。

14 喜屋武小学校前の拝所

コンクリートで周囲を囲んだ拝所で、向かって右を〈仲間〉が、左を〈上地〉が拝む。ムラ行事でも拝んでいる。

15 〈大前原〉の神屋

前原門中〈大前原〉の神屋で、近年ムラ行事でも拝んでいる。

16 ジルーマーの拝所



久高島の漁師ジルーが遭難して流れ着いた浜をジルーメー浜と呼び、海に向いた拝所が造られている。ハーリーの朝一番に拝むほか、ピーリンポーリンでも拝んでいる。

17 具志川ノ御イベ

『由来記』に見える具志川城跡内の拝所で、ナカリュグシンとも呼ばれるが、現在城内のどこにあたるかは特定できない。

❖カー❖

1 チャンガー（喜屋武井泉）



水量豊富なカーで一帯には飲料水用、野菜洗い用、男女別の共同浴場、洗濯用とさまざまに利用できる水場が造られていた。

2 チクブガー（チクブ井泉）



フルグスク内のカー。カミガー、アジガー、ムトゥガーなどとも呼ばれ、祭祀ではカミンチュがここでウビナディ（額に水を付けて清めること）をしてから、トゥンへ向かったという。ムラのンブガー（産井泉）でもあった。

3 ニニグチガー（ニニグチ井泉）

石積で円形に造られた井戸で、ウクマガー（奥間井泉）とも呼ばれ、大幸地門中ゆかりのカーだと伝わる。ムラのンブガーのひとつで正月の若水にも使われた。戦前は〈仲間〉が正月に豚の肝を供えて拝んだという。



1945年ごろの字喜屋武（北部）

凡例
.....公的機関
.....カミミチ（神道）
.....クムイ（小堀、溜池）
.....拝所
.....広場
.....マークサラーで牛骨を吊るす場所

④ ナンザトゥガー（並里井泉）

P14-3D

ナンザトゥヌトゥンの東の木の下にあるカーで、大きな穴が残っている。ゆかりのある門中が拝む。

❖広場❖

① ヘーランメー

P4

かつて間切番所があった場所の西側にある広場で、長年喜屋武青年会による旧盆のエイサー演舞の舞台にもなっていた。

② マーチュエグワー

P4

泉の広場とも呼ばれる。3月と9月の厄払いの行事マークサラウグワンでは、集落の四隅に吊るす牛骨を取るため、この広場で牛を屠殺して肉や血を人々に配った。

③ 喜屋武馬場

P4

かつて競馬が行われた、シマバ（馬場）とも呼ばれるムラの馬場。マーチュエグワーの東の道路で、クシヤマ（後山）に向かって直線の延びる馬場だったという。戦後は市道となっている。

❖その他❖

① ヒータディー（火立て）

P14-3C

尚賢王の時代に船の出入りを見張る烽火台（狼煙台）が沖縄本島や離島の各要所に設けられた。喜屋武では、シングチガー東の小高い丘の上に造られたという。目当ての船が見えたら、遠見番が直ちに狼煙を上げて首里に知らせたためヒータディー（火立て）という名で呼ばれた。

ふくじ 福地

方言名：フクジ
人 □：185人
世帯数：79世帯

集落は海岸線から離れているが、名城ビーチ近くの海に「福地海」という名称が残るように、かつては漁業も行っていた。古い村落行事や歌などにも、その面影を感じられるものが残っている。

❖拝所❖

① ナカダカリヤー（中村渠屋）

P7



ナカントウン（中の殿）とも呼ばれ『琉球国由来記（以下由来記）』の「中村渠の御イベ」にあたるウタキ（御嶽）だといわれる。右手には按司のフニシン（骨神）がある。

② マチャドゥン（マチャ殿）

P7



『由来記』に「福地之殿」と見え、ウマチーではミキ（神酒）などの供物が供えられた重要な拝所である。ナカダガリヤーと対になる拝所だと考えられている。

③ アガリドゥン（東江殿）

P7

『由来記』の「東江之殿」とされる。現在、敷地内には南向きと北向きの小さな祠が造られ、周辺部には石垣跡も残っている。

④ ニシントゥンチ（北の殿内）

P7

『由来記』の「福地巫火神」だとされるヌルヒヌカンや各門中の香炉が祀られている神屋。

敷地内にはワチワチという

各門中が古墓を遥拝するた

めの連棟式の祠がある。

⑤ ビージル（鬢頭庵）

P7



石組みの祠に霊石が祀られた拝所。8月11日の綱引きの日に海の魚を供えて豊漁豊作を祈願したり、3月のミジナディー（水撫で）では子どもの健康祈願をしたりした。また子どもが生まれると酒を供えて健やかな成長を祈った。

⑥ メーントゥンチ（前の殿内）

P7



ノロを出す家である〈布殿内〉の屋敷内にある神屋で、8月の綱引きをはじめ、ムラウグワン（村御願）などで拝む。7月の門中拝みでは福地の各門中が拝んでいる。

⑦ アガンジョーヤー

P7



畑地の一角にある拝所で〈仲道〉が管理している。ウマチーやジュールクニチー（十六日）などに重箱料理を供えてムラで拝むほか、各門中も7月の門中拝みで巡拝する。

⑧ 〈酒屋〉の神屋

P7

タキムトゥ（嶽元）といわれる旧家の神屋。

⑨ 〈仲道〉の神屋

P7

クニムトゥ（国元）といわれる旧家の神屋。

⑩ 〈並里〉の神屋

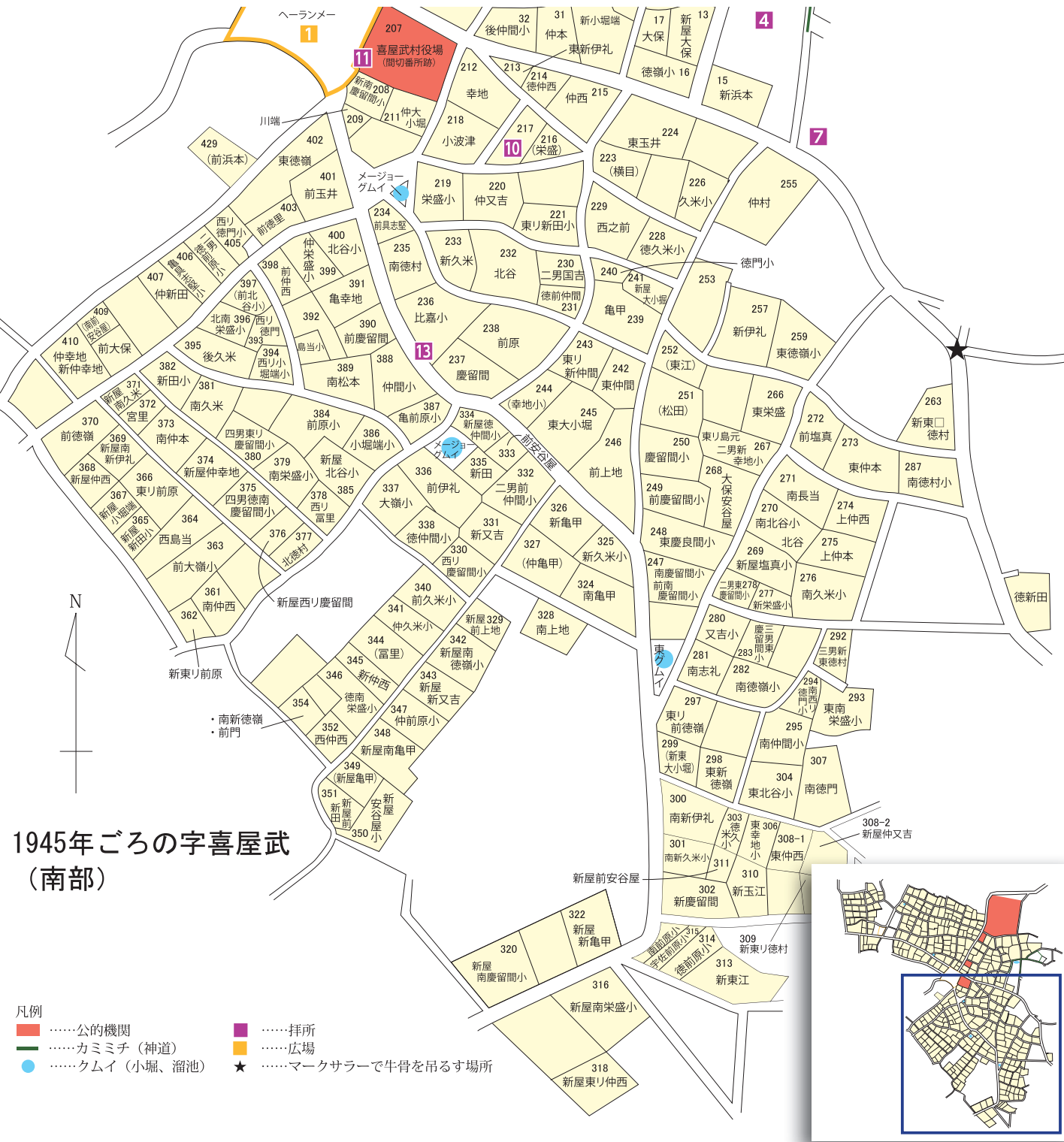
P7

ムラムトゥ（村元）といわれる旧家の神屋。

⑪ 〈仲間〉の神屋

P7

南山（現字大里）から福地へ来たといわれる旧家、〈仲間〉の神屋。



1945年ごろの字喜屋武（南部）



1945年ごろの字福地

- 凡例
- △ ……製糖工場
 - ……公的機関
 - ……綱引きの境界線
 - ……カミミチ（神道）
 - ……拝所
 - ……広場
 - ……カー（井泉）

⑫ **ンムマチー（芋ウマチー）の拝所** P7

製糖工場があった場所の南の辻に石を祀った小さな祠があり、戦前まで9月に芋の豊作を祈るンムウマチーが行われていた。

⑩ **ウフンティンチジ** P14-2E

かつて集落北に小高い場所があり、厄払いをするときにここから西方の海に向かって拝んだ。頂上北側のサカウケーでは、葬式帰りの女性たちがアマワカリと呼び、小怪^{こみち}の左右の草を結んだサン（植物を輪結びにした魔除け）をまたいで厄払いした。

❖カー❖

① **アガリンカー（東の井泉）** P15-2F



ハンジャタマガー（波平玉川）としても名高い、福地のンブガー（産井泉）。昔、波平^{ハンジャ}（現字南波平）は福地のすぐ北側にあったが、現在地へと移ったため、このカーを福地のシーサー（獅子頭）と交換したという伝承がある。

② **ナカンカー（中の井泉）** P15-2F

ムラガー、福地ガーとも呼ばれ、昔はここがンブガーだった。主に洗濯や野菜洗いなどに使われ、隣のクムイ（溜池）では農作業帰りに手足や農具を洗ったり、牛馬を水浴びさせたりした。

やまぐすく 山城

方言名：ヤマグスク
人 □：99人
世帯数：49世帯

❖拝所❖

① **山城グスク** P15-3G

集落から山城古島遺跡を挟んで南の丘陵にあり、シチャグスク（下城）ともいう。ウィーグスク（上城）と呼ばれる上里グスクとは長らく別のグスクと考えられてきたが、近年同じグスクだとわかり、一部を指して山城グスクと呼んでいる（P16参照）。

② **シンザトゥヌマー（新里の庭）** P9



『琉球国由来記（以下由来記）』の「新里之殿」とされている拝所で、シチャグスクへのウトゥーシ（遙拝所）と呼ぶミチムン（ヒヌカン）やクバオーの嶽、イビなどの拝所が点在するほか、アシチャーガーやその周辺の拝所もここから遙拝している。現在でも綱作りはこの場所で行っている。

③ **カニマンウタキ（カニマン御嶽）** P9



建物はなく、石を積み上げた拝所のあるウタキ（御嶽）。ムラウグワン（村御願）では、この拝所を拝むほか、サクマヌトゥンや山城グスク内の拝所も遙拝している。

③ **トーンハラガー（トーンハラ井泉）** P15-2F

国道331号近くの石垣で囲われた古いカーで、アジガー（按司井泉）とも呼んでいる。南側に福地グムイというクムイがある。

④ **メーンカー（前の井泉）** P7

かつてのムラの主な飲料水源で、崖下にあったため、長い階段の上り下りが大変だったという。現在は埋められている。

❖広場❖

① **福地馬場** P7

集落の南にあるンマウイー（馬追い）、ンマウティーとも呼ばれた馬場跡で、かつては松並木が美しく、競馬も行われたという。1880（明治13）年の沖縄県統計書には幅約11m、広さ約9千坪と記されており、約270mほどの長さがあったと考えられる。現在でも8月の綱引きはこの馬場で行われている。

② **トゥンチジョー（殿内門）** P7

集落の中心地の辻をトゥンチジョーと呼んで、ジューグヤー（十五夜）にウシデークを行った。戦前には盆のウークイ（お送り）に〈布殿内〉から馬を出す行事もあったが詳細は不明である。

③ **メーンモー（前のモー）** P7

ムラのアシビナー（遊び庭）で馬場の北東にある広い辻。綱引き後のムラアシビ（村遊び）や角力大会もこの広場で行った。

具志川グスクを西端に多くのグスクが連なる丘陵地帯の東端にあたり、琉球王府の歌謡集である『おもろさうし』にも多数の謡が残る。かつて上里の東方にあった崎村にゆかりのある拝所なども多数残っている。

④ **トゥンチ（殿内）** P9

ヌン殿内^{ドンチー}の神屋。かつてのムラウグワンでは、まず最初に新屋門中が拝み、その後に他門中が拝んだという。

⑤ **ナカチ（仲地）** P9

新屋門中の本家で、ムラムトゥ（村元）とも、按司世のタキムトゥ（嶽元）とも伝わる旧家、〈仲地〉の神屋。

⑥ **サキ（崎）** P9



古い時代に上里東方にあった崎村から移ってきたという仲門^{ナカジョー}門中の祖先〈崎〉の神屋で、単にサキと呼んでいる。崎村からは3人の兄弟が移って来たといわれ、長男が上里の〈上良小〉、次男が山城の〈仲門〉、三男が小波蔵の〈玉井〉の始祖となったという伝承がある。

⑦ **クミシヤー（米須屋）** P9

敷地内の2棟のうち、東側の連棟式の神屋がクミシヤーである。崎村の〈崎〉の次男と三男の拝所とされるが詳細は不明である。

⑧ **佐慶グスク** P15-4G

『由来記』の「サケ城ノ御イベ」だとされるグスクで、尚円王代に鑄造されたという希少な古銭^{きんえん}、金圓世宝^{せほう}も出土している。

⑨ **サクマヌトゥン（佐久真の殿）** P9

『由来記』に「佐久真之殿」とある拝所。カニマンウタキに隣接していたというのが、道路建設で場所が確定できなくなった。

⑩ **メーミーヤ^{メーミーヤ}の前新屋**の屋敷跡 P9



〈前新屋〉の屋敷跡の中央に、石を組んで造った拝所がある。これは神の化身である鳩の知らせで先祖のフニシン（骨神）を見つけ、祀ったものだといわれている。

⑪ **メー^{メー}トツンチ^{トツンチ}の前新屋**の神屋 P15-3F

〈志茂〉の屋敷内にある〈前新殿内〉を祀った神屋。

⑫ **メー^{メー}ナカジョー^{ナカジョー}の仲門**の神屋 P9

仲門門中の本家、〈仲門〉の屋敷跡に建つ神屋。

⑬ **メー^{メー}トバル^{トバル}の桃原**の神屋 P15-3G

新屋門中の旧家である〈桃原〉の神屋。

❖カー❖

① **ウィーンカー（上の井泉）** P15-4F

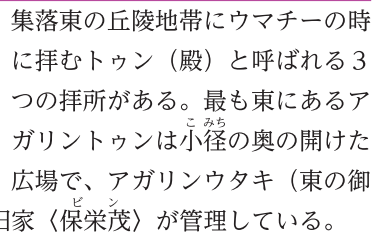
シチャグスクにあるカー。かつては水がきれいで飲用水源としても使うことがあった。グスクガーとも呼んでいる。



1945年ごろの字山城

方言名：チケーナ
人 口：37人
世帯数：22世帯

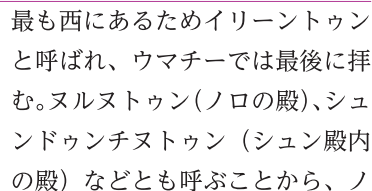
1 アガリントウン（東の殿）



■2 ナカントウン（中の殿）

アガリントゥンとイリーントゥンを結ぶ小径の途中にある佐久真門中が拝む拝所で、サクマヌトゥン（佐久真の殿）とも呼ぶ。

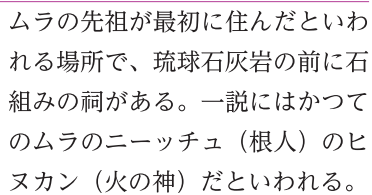
■ イリーントウン（西の殿）



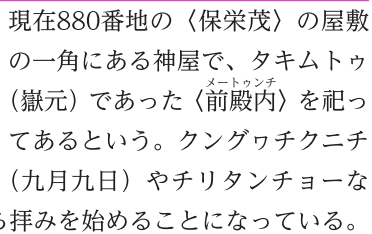
口と関係があるトゥンだとされており、もともとはノロを出す
家である〈徳東江^{トゥクアガリー}〉の拝所だといわれている。



■4 ニービヌカン



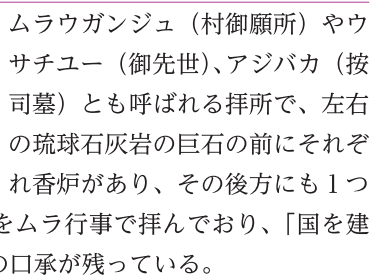
5 メートウンチ（前殿内）



■ ナカジョーヤー（仲門屋）

アジュー（按司世）からの旧家だと伝わる〈仲門〉の神屋をナカジョーヤーと呼んで祀っている。現在はコンクリート造の神屋が建つのみで居住者はいないが、〈保栄茂〉が管理している。

7 アジシー



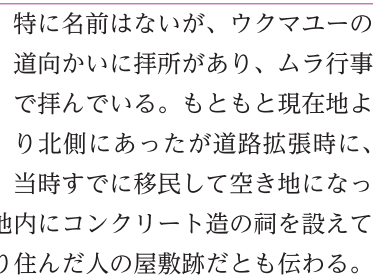
8 ウクマユー（奥間世）

かつてクニムトゥ（国元）であった〈奥間〉の神屋で〈佐久真〉の一角にあるため〈佐久真〉のカミアシャギとも呼ばれる。『球陽外巻遺老説伝』には東辺名村奥間里の子の伝説が見える。

9 スンドゥンチ（スン殿内）

かつてノロを出した家だといわれている旧家、〈徳東江〉の神屋で、シュンドウンチ、玉城のカミアシャギとも呼ばれている。

10 〈仲新大城小〉の一角の拝所



11 ミーガーグスク

文献には東辺名グスクと記載されていることも多い。野面積みの石垣が残っており、わずかではあるがグスク土器も採取されている。集落南の丘陵に位置し、ムラ行事で遙拝している。

12 ミーガーゴ

古い時代の人骨が祀られているという拝所。戦前までは現地へ行って拝んでいたが、近年は道もなくなり、遥拝している。

13 トーマグスク（当間城）

かつての城主は朝鮮人で、後年朝鮮に帰ったという伝説がある
グスクで、現在の地番は字喜屋武だが束辺名のムラで拝んでいる。周囲は畑地でグスクのある一角だけが森として残っている。

❖力❖

① ニービヌカー（ニービヌ井泉）

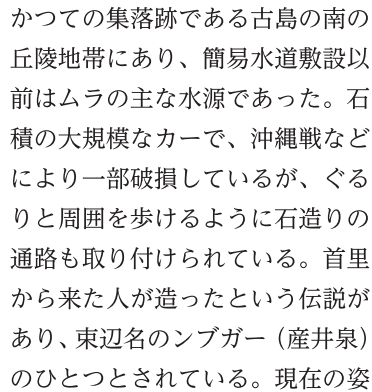
ニーブヌカンに向かって右手にあるカー。現在水はないが、カミガー、ギーチャーガーなどとも呼び、ムラに最初に入ってきたといわれている〈保榮茂〉の祖先が使ったという。

② トーマガー（当間井泉）

トーマグスク一角のカー。簡易水道敷設以前は飲料水源としても使用された。現在は企業の敷地となって埋められている。

昔、東辺名に保栄茂タルチー（タラチーメー）という剛力の農夫がいた。ある日、タルチーの噂を聞きつけた力自慢の男が、勝負をしようと首里からやってきた。その時タルチーは留守だったが、妹が出て、「兄は今よそへ行っていますが、すぐに戻りますから煙草でも吸って待っていてください」と、石でできたタバコ盆を軽々と持ち上げて男の前に置いた。このタバコ盆は大人の男が数人がかりでも持ち上げられないほど重いものだったので、男は「妹でこんなに力があるなら、タルチーにはとてもかなわない」と諦めて帰ったという。また、同様に勝負を挑んできた男に、弟のふりをして鉄の棒を地面に差し、「この棒が抜けないようなら兄とは勝負にならない」と諭して帰らせた話や、牛の4本の足をつかんで、ぎぶぎぶと水に浸けて洗ったという話など、たくさんの伝説が残っている。ちなみに、東辺名の保栄茂門中、宇喜屋武の志礼門中^{シリ}と新腹門中^{ミナハラ}は、保栄茂タルチーの子孫だといわれている。

③ キサガー（キサ井泉）



に整備されたのは近代になってからで、シマティマ（馬手間。ムラの女性が他地域に嫁ぐときに相手から納められた罰金）を原資として造られたという話が残っている。

④ メーバルガー（前原井泉）

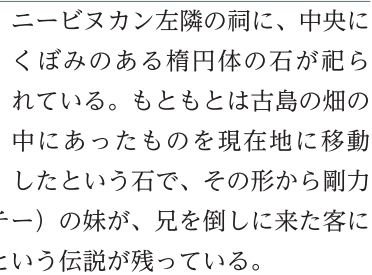
古島にあったカーで、キサガーが造られるまで主な水源として使われていたという。現在は所在地も不明であるが、ミーガークスクやミーガー、キサガーなどとともに遥拝される。

⑤ ミーガー

ミーガークスクにある車で、水がきれいで飲料水源でもあった。山に降った雨水が、流れてきて溜まるようになっていた。

❖その他❖

① タラチーメーのヒートゥイ（タバコ盆）



② カミミチ (神道)

集落の東にあるアガリントウンなどの前を通る道はウチャタイミチと呼ばれ、かつてカミンチュが拝所に行く時に通ったカミミチである。死者を乗せたガン（龕）はこの道を避けたという。

う え ざ と 上 里

方言名：ウィーザトゥ
人 口：54人
世帯数：25世帯

朝鮮の史書にその名が見える温沙道の伝説に彩られたウィーグスク（上里グスク）の南麓に広がったムラで、多くの拝所が集落内外に点在している。西隣の束辺名村と合併し、現在は字束里となっている。

❖拝所❖

1 ウィーグスク（上里グスク）



中山王の武寧に敗れて、朝鮮に逃げ延びたという温沙道の居城だったといわれるグスクの跡。上江、^{ウィーグ}謝名などの門中がウタキ（御嶽）として拝んでおり、イビや各門中の

トゥン（殿）など、複数の拝所がグスク内に点在している。石積の遺構が多く残り、石を密に敷き詰めた場所は、かつてカミンチュ（神人）が座って祭祀を行った所だとされている。

2 ウィンダカリ（上村渠）

上江門中の管理する神屋で、古い時代に現在地より高いムラ（ウィーグスクか？）で暮らした祖先を祀ったものだという。『琉球国由来記』の「神アジアゲ」ではないかと考えられている。

3 〈上江〉の神屋



上里のクニムトゥ（国元）といわれる上江門中の本家〈上江〉の神屋で、門中がウマチーなどで拝む。2016（平成28）年の建て替えで、もともと東隣にあったアサゲと棟

続きになった。向かって左が〈上江〉の神屋、右がアサゲである。

4 アサゲ



ノロを出す家であった〈上江小〉の神屋。もともとは327番地の〈上江小〉の屋敷内のアサゲにあった香炉を現在地に移した拝所だという。ムラウグワン（村御願）ではここを一番最初に拝むことになっている。

5 ミーヤ（新屋）

328番地の〈^{ジャナ}謝名〉から香炉を移したという神屋で、〈謝名〉とも呼ばれている。ムラウグワンでも拝んでいる。

6 ムラムトゥ（村元）



アシビモーの一角にあり、ウフザトゥヤーとも呼ばれている拝所。かつて上里で行われていた八月遊びのプーマー踊りを伝え、ムラのために尽くした人を祀ってあるといわれている。西隣は〈上良小〉が管理している拝所である。

7 〈上良小〉の神屋

上里のムラムトゥ（村元）といわれる〈上良小〉の神屋。同家がかつて集落東にあった崎村の旧家〈^{サキ}崎〉の長男筋で、字山城の〈^{ナカジョー}仲門〉、字小波蔵の〈^{グマイ}玉井〉と兄弟だといわれている。



8 〈^{ジャナ}謝名〉の屋敷跡

かつて〈謝名〉の屋敷であった場所をムラウグワンなどの時に拝んでいる。現在は空き地になっており、居住者もない。

9 チブラーヤマ（チブラー山）

雑木林の中にあり、かつては古い時代の人骨が多く見られたというアジシー（遠祖を祀った墓）。ムラウグワンで拝んでいる。

10 公民館隣のアジシー



ヤマトウンチュー（大和人）の墓だとされているアジシー。中に納められていた骨蔵器にはミガチ（銘書き）もあったが、判読できない文字で書かれていたという。

ムラウグワンでは上里コミュニティセンターの駐車場南端より、ここを含め南部にあるいくつかの拝所を遙拝する。

11 公民館南方のアジシー

沖縄戦で上里の人々が避難したアガリン壕というガマ付近にある拝所で、ヤマトウンチューの骨が祀られていたという。

12 ホーヤーブリ（ホーヤー岩）

集落南方にあったホーヤーブリという岩に掘り込まれていたというアジシー。現在は糸豊環境美化センターの敷地内に移動され、小さな祠を仕立てて祀られている。

❖カー❖

1 ミートゥガー（夫婦井泉）

アシビモーの南にあるカーで、ムラウグワンなどで拝む。現在はコンクリート張りになっているため、詳細は不明である。

2 ンブガー（産井泉）

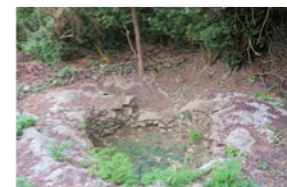
上里のンブガーで、集落の西外れにある。現在はコンクリートで整備されており、階段を数十段降りた所に水場がある。

3 ユタカガー（豊井泉）



ンブガーの東、農業用水給水所の奥にあり、コンクリート造の屋根には1953（昭和28）12月に完成したことが刻まれている。背後の山から流れてくる水を溜めたカーで、手前には沖縄戦時の艦砲射撃でできたクムイ（溜池）が残る。

4 カミガー（神井泉）



ユタカガーの道向かいの一段低くなった場所にあり、フルガー（古井泉）とも呼ばれている。現在、水は溜まっていなかったが、大規模な石積の^{くぼ}窪みが残っている。

❖広場❖

1 アシビモー（遊びモー）



かつてムラヤー（村屋、公民館）があった場所の南側の広場は、アシビモーと呼ばれ、ジューグヤー（十五夜）の綱引きなど多くのムラ行事が行われた。また若者たちが夜に集まって語らい、歌三味線に合わせて歌ったり、踊ったりしたモーアシビー（モー遊び）もここで行われたという。

一緒に歩こう 名勝地・歌碑・文化財

喜屋武海岸及び荒崎海岸

字喜屋武から字束里にかけて広がる美しい海岸景勝地で、名勝としての価値が高いとして2012（平成24）年に国指定の名勝及び天然記念物となった。琉球石灰岩の海岸段丘やサーフベンチ（波食棚）の海食地形など多種多様な地形や岩礁海岸植生が観察でき、倭寇が財宝を隠したとの伝説が残るカタハラグスクや、琉球王府の史書『球陽』に1832（尚瀨29）年の台風時の大波で打ち上げられた記録があるカサカンジャーなどの大岩も見どころ。またイソフサギ群落やテッポウユリなど、四季折々の野生の花も豊富に見られる。

喜屋武岬から荒崎海岸を臨む

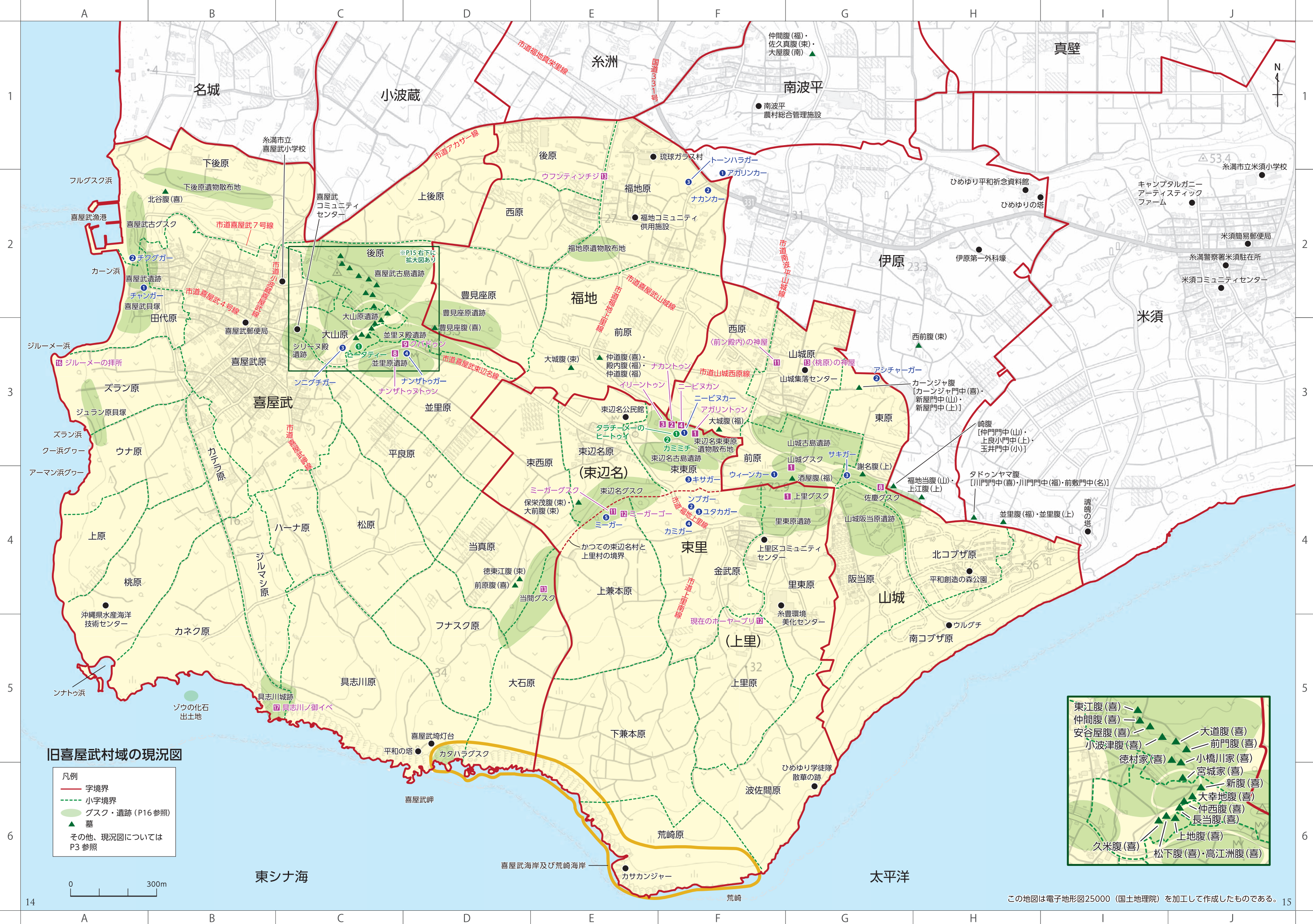
カサカンジャーは笠かぶりの意

真福地のはいちゃう節之碑

「真福地のはいちょう節」は福地が発祥とされる歌謡で、2007（平成19）年に歌碑が建てられた。はいちょう（はいちょう）とは、牛の角の形をそのまま残して作られた酒盃のことで、下に置くことができず次々と手回しで飲まれて元の所に帰ってくることから、漁師たちが無事に港に戻ることを祈願して歌われたという。かつて綱引き後の酒宴は、ムラの長老たちによってこの曲が合奏、合唱された。

ウルグチ（ウリグチ）

山城にある岩を削って造った海への階段で、漁に出たり、潮水を汲んだりする際に使った。詳細は不明だが、明治の終わりごろ造られたといわれる。周囲の海岸は、琉球王府が薩摩に隠れて貿易を行う港だったとの伝承も残っている。



謎の南山王—山城グスクと上里グスク—

旧喜屋武村域には8か所のグスクが所在する。その中でも特徴的なものは東里にある面積約22,000㎡の山城グスク/上里グスクである。1960年代から1980年代にかけての「グスク論争」の際、「グスク聖域説」の根拠のひとつとして山城グスクと上里グスクの立地が取り上げられたことがある。両グスクは隣接しており、山城グスクが崖下に位置するのに対し、上里グスクは崖上に位置している。この立地状況は、人文地理学者の仲松弥秀が、上里グスクから山城グスクへ容易に投石できるほど近距離にあることなどから「グスクは城でない」とするグスク聖域説を提唱するきっかけのひとつとなった。

糸満市教育委員会でも長らく、山城グスクと上里グスクを別々のグスクと認識してきたが、1993（平成5）年、城郭考古学者の千田嘉博によって縄張り調査が行われ、両グスクは1つのグスクであることが明らかとなった。その後、グスク研究者の眞嗣一によっても縄張り図が作成された（右下図）。両者の縄張り調査の結果、「山城グスク」は北側部分、「上里グスク」は南側部分の石積であることがわかっている。眞嗣一の縄張り調査によると、グスクは3～5mの高さの石積で囲まれ、上里グスク側の石積には防御的役割を持つ突出部（1～3）が配置され、山城グスク側は転石の巨岩間を石積で結び、石積を高く積み上げ周囲を見渡す高台（チ）などが設けられている。グスク内は8か所の平場（Ⅰ～Ⅷ）が石積で区画される複雑な構造となっており、Ⅰの平場がグスクの中心部分と推定されている。

上里グスクは、伝承では上里按司によって築城されたと伝えられるが、文献記録が殆どないため、詳しいことはわかっていない。複数いたはずの上里按司の1人について、沖縄学の父と称される伊波普猷は、『李朝実録』に掲載されている「温沙道」と呼ばれる人物ではないかと考えている。伊波によると「温沙道」の文字は李朝側が琉球側の発音を自国の文字に当てはめた際の表記であるはずで、「温沙道」の表記は琉球側の「キーザト（ウィーザト）」の発音を当て字にしたものではないかとした。そして「キーザト」は、「上里」にあたり、上里按司であるとした。『李朝実録』の別の記述では、温沙道は「南山王」とも表記されている。

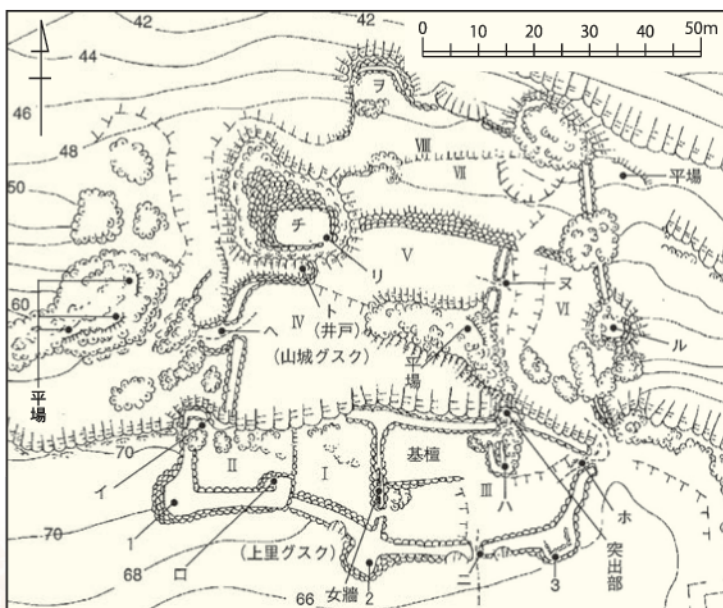
しかし『明実録』に記載のある南山の王位は承察度一応汪祖—他魯毎と継承され、そこに温沙道は登場しない。それでは『李朝実録』に登場する南山王温沙道とは一体何者だろうか。

彼の居城した上里グスクは、強固な造りをほこるものである。これほどのグスクを造営する力を持った上里按司の正体については、山城グスク/上里グスクの本格的な発掘調査が行われる日まで謎に包まれたままである。

旧喜屋武村域のグスク・遺跡など

No.	字名	名 称	主な時代
1	喜屋武	喜屋武貝塚	縄文時代
2		当間グスク	グスク時代
3		下後原遺物散布地	グスク時代～近世
4		喜屋武古グスク	グスク時代
5		喜屋武遺跡	縄文時代
6		ジュラン原貝塚	弥生～平安並行時代
7		シリーヌ殿遺跡	グスク時代
8		並里ヌ殿遺跡	グスク時代
9		並里原遺跡	縄文時代
10		カタハラグスク	グスク時代
11		豊見原原遺跡	近世
12		ゾウの化石出土地	
13		大山原遺跡	グスク時代～近世
14		具志川城跡	グスク時代
15	福 地	福地原遺物散布地	近世
16	山 城	山城グスク	グスク時代
17		山城古島遺跡	グスク時代
18		山城阪当原遺跡	グスク時代
19	東辺名	東辺名グスク	グスク時代
20		東辺名古島遺跡	近世
21		東辺名東東原遺物散布地	グスク時代～近世
22	上 里	上里グスク	グスク時代
23		佐慶グスク	グスク時代
24		里東原遺跡	グスク時代～近世

※遺跡の年代については現時点でのものであり、将来の調査の進展に伴い変更される可能性がある。



図出典：眞嗣一「沖縄南部旧喜屋武間切のグスク群について（一）」『沖縄県立博物館紀要』第24号 沖縄県立博物館1998年3月（一部加工）

糸満市の歴史と文化を歩く「屋号地図」は糸満市ホームページからダウンロードできます。

糸満市 屋号地図

検索



旧兼城村編・旧高嶺村編・旧糸満町編・旧眞壁村編もこちらから！

糸満市の歴史と民俗を歩く 旧喜屋武村集落ガイドマップ

発行日：令和3年3月25日

発行：糸満市教育委員会

編集：糸満市教育委員会総務部生涯学習課

〒901-0392 沖縄県糸満市潮崎町1丁目1番地 TEL 098-840-8163

令和2年度 沖縄振興特別推進市町村交付金
生活感幸（観光）環境づくり事業